
無題 3 2 1 5 5

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題32155

【Nコード】

N7550X

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

無題32154からの続きとなっています

瞳を閉じると瞼が下りて来たということだから、真っ黒になって光の残影のようなものだけが仄かに見える。あと、集中すれば金の粒子たちが泳いでいるのが見える。これは僕以外のみんなだっとうだろう？目を瞑れば見える、星の流れのような、金色の粒子たちが真っ黒の中を踊るようにして走り回っている。集中しないとぼやけてしまうけど、見ようと思えば見ることが出来る、金色の粒子さ。どうい理由でこれが見えるのか、僕は知らない。これも甲の一部分ということだ。

にしても寒い。毛布の一つや二つがあっても良い。玩具ばかり一辺倒に置かれているこの灰色の牢獄で、僕は上は長袖のシャツ一枚だし、下は薄手のジャージだし靴下だっつて無いよりはましだが大して温かくもないさ。毛布が欲しくなる寒さだ。陽も落ちたんだ。これからは寒くなっていくばかりだ。

ガタン…

聞き覚えのない音が聞こえたせいで僕は瞼を開く。寒さのせいで鳥肌をたてながらもキリンのぬいぐるみから立ち上がり、静まり返ってしまった牢獄で、じつと耳を澄ましてみる。自動車が走る音も人の喋る声も小鳥のさえずる声も聞こえない、隔離された無音の空間で、聞き覚えのない音を聞くのは珍しい事だ。

再び　ガタン…は鳴って、ああ、やはり何か…何かがいる気配がする…と実感して僕は、音の方へと歩を進めてみる。壁の向こう側から聞こえてきている音。丁度鉄格子の窓がある側の壁だ。ガタン、という音は頻繁に鳴り響くようになって、壊している、そう、壁を破壊しようとしてくれている何者かがガタンガタン言わせているのではないか、と僕は察した。

途端に気持ちが高揚した。光線が放射状に僕の頭から光を放ち、牢獄の暗闇を照らし上げる光源となってパーツと開けた世界。煮詰

まっていたらしい脳味噌が新たな活路を開いてくれたおかげだ。存在する意義を音がなんちゃらとか言っでごまかしたりして時をやり過ぎしていた孤独を好むはずの僕も、壁が壊れてくれる可能性を知った瞬間にパーツとなってしまうた。矛盾とはこのことか。でも誰にも言っただけなんだから良いんだ。僕の脳味噌の中で僕が矛盾したことを想像しようが、誰に迷惑がかかる？僕の思考が透けて世界に伝播されない限りは、何の問題もないんだよあははは。つつわけで期待。壁よ開けー、開けー。

しかし、と冷静にならなければならぬ。陽が落ちて真っ暗の牢獄内と僕のお腹の減り具合から察するにもうじき奴が来るはずだ。仮面をつけた物言わぬ監獄者にガタンという音を聞かせては……。

僕はそう気が付いて慌てて灰色の部屋に唯一ひとつだけある鉄扉その方角に身体をむけたら、すぐ目の前に、監獄者、いた。

仮面をつけて斧と食事を持った僕と背丈は同じくらいの監獄者。「……………」彼の無言の威圧が恐ろしい。そして、ガタン……が鳴った。鳴ってしまった。大きな音だ、監獄者がよっぼど耳の聞こえない人でなければ、聞き取ったことであろう。そして実際に聞き取って、異変を感じ取ったらしい。平常が壊れる可能性が近づいていることを理解し、そうされないよう抵抗しようと感じたらしい。監獄者は始めて声を発した。小さな、ちいさな、とても聞き取り辛い声というか呻きだったわけだが、僕の耳にかすかに聞こえて、僕はそれをこつこつという言葉だと認識した。秩序を乱すものは抹殺して血みどろ。聞き違いでないならば背中に背負っている斧で、ガタン、という音を鳴らして壁を壊してくれていると窺えるその僕にとっての救済を、斧を背負った監獄者は血みどろにするといった。血の塊にするという意味だ。

監獄者は僕への飯、盆に乗っている夕食を一人用テーブルの上に置いてから、颯爽と立ち去ろうとする。心なしかいつもより足の進む速度が早く見える。ガタンはまだ鳴っている。とめなければ、救済は消える。光明は血に、僕は青白い牢獄で闇を纏う。いやだ、い

僕はキリンのぬいぐるみの上に腰を下ろしていて、瞼を開くとすぐに左手が大丈夫かどうかと視線を動かした。大丈夫だった。左手はそこについている。安堵した。あれは夢だったんだ、と僕は今そのことを実感した。何時の間に寝てしまったんだろう。どうやら丁度、陽が落ちた辺りらしいけれど、夕飯はまだ運ばれてきていないみたいだ。テーブルには埃を被っている本が数冊置かれているだけで、お盆も、食事も、血もない。

僕はひどくどきどきしている。心臓はフルに稼働していて、血管が収縮してるような圧迫感があつて、どこか息苦しい。さっきガタン…という音が鳴り始めたのは、ちょうど陽が落ちて少し経ち、夜の青白さが灰色の牢獄を染めるようになった頃。ちょうど今辺りだ……。

ガタン……

聞こえた。心臓のどきどきという喧しさはさらに強まりを見せ、いても経つてもいられない気持ちにさせられ、僕は駆け出していた。背後に振り向く暇も無い。さっきのが夢で今が現実だとして、さっきの夢が正夢だとしたら、僕には一切立ち止まって様子を窺っている暇などない。何としてでも壁の向こう側にいる僕の救済に、逃げる、と伝えなければならぬ。ガタン。ともしっかりその音が大きく聞こえる壁の位置を特定してから、僕は声をあげた。まだ仮面の人は鉄扉を開けていない。叫ぶなら今の内だ。「逃げる！ 僕のこととは後で助けてくれ！ 今はタイミングが悪いから、そこを立ち去ってくれ！」心臓がやばい、破裂しそうだ。でも伝わってくれたのだろうか、ガタン、という音が一旦止んだ。僕は安心する。一旦離れてもらって、夕飯を食べ終わった頃にでもまた来てくれれば、その時は本当に僕は救済してもらえるかもしれない。

ガタゴトン！

しかし予想以上に凄まじい音が鳴ったことで、驚かされる。何が起こったのかと壁を注視すると、さらに驚かされてしまって、足元

もしれない、この肩ア！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬどうにかして引っ張れ、
ていうかそうだと向こうにいる救済の奴助けてちょんまげ、引っ張っ
てくれちょんまげって何だよ、早く引っ張って引っ張って引っ張っ
て、ああ、もう目の前にまで仮面の人に来てしまった！ 逃がし
てしまうなら、血みどろに 短絡的な思考回路をしている人だ、
と僕は思った。逃がしてしまふなら血みどろ、って極端にも程があ
る。冷静になれよ。頭を冷やせよ。仮面を外せよ。

斧が僕の目の前で、刃を月明かりに反射させながら、振り上げら
れる。銀色に輝いている刃の部分が、僕の頭目掛けて、振り下ろさ
れる……。

しかし本当に刃が、僕の視界から1という数字のように縦になっ
て落ちてきた瞬間、僕の頭を貫くであろうその時に、僕の両足はす
ごい勢いで引っ張られて、一気に上半身が向こう側に抜け出た。

……ガキンツ！

刃が床に振り下ろされてしまった音が背後から聞こえる。あれが
ザシュ、という音だったら僕の頭は大出血サービスだったろうが、
僕は今牢獄の中にはいない。外にいるのだ。

見上げれば明るい満月。夜空にはラメのようにキラキラしている
星々と、暗い色をしてはいるが広大な雲たち。穏やかではあるが、
たしかに吹いている夜風。かすかに感じる生き物の気配。そして目
の前には、犬の耳を生やしている幼い少年。どこか野生児染みた、
服を着た犬みたいなの、しかしどうみても幼い少年である者が、目の
前で。

「危ないトコロだったね」

ちよつと馬鹿っぽい口調で、にんまりと笑った。その笑い方もな
んか馬鹿っぽい。

「立てますかあ」

などと言つので僕はうなずいて、そして「助けてくれてありがと
う」と言つと、デヘヘ、と汚らしく笑ってから、頼まれたんですよ
ー、と犬耳の少年は言った。誰に？と尋ねようと思つたが、背後の

壁が斧で壊されようとしている音、ガアン、ガアン、と聞こえてきたので、僕は慌てて飛び上がりそうになる。

「た、助けてもらってありがたいけど、いろいろ事情もわからないけど、遠くに逃げないと斧を持った監獄者が来てしまう」

と僕が言つと少年は「なるほど」と言つて、

「なら僕の背中に乗るとよろしいでしょお。巨大な犬に変身することもできますよ」

とへらへらと馬鹿な感じで舌を出したと思つたら、もう少年は巨大かつ毛むくじゃらな大型犬に姿形を変えていた。茶色。何て奴だと驚きながらも僕は彼の背に乗つて、遠くに逃げてくれ、と頼み込んだ。「りようかいー」と軽い調子で大型犬は喋る。

僕は大型犬が走り出して遠くに逃げるその寸前に、周囲の様子を窺つた。この建物の様子は覚えておいた方が良くかもしれないと思つたのだ。

すると不思議な光景が目につく。緑の、蛍光色という奴だろう。月明かりを吸収してとても光り輝いているそれが、いたるところに散乱していた。門らしきレンガとか、こげ茶の土とか、背後の僕が今までいた牢獄の壁とかに。緑色の蛍光色のそのこびりつき方は、夢でみた僕の左手が作った血貯まりに少し似ていたから、何か怪物の血とかかな、と思つて苦笑したくなる。スプレーか何か、落書きみたいな感じが血に見えるだけだろう、蛍光色の血なんて、まさに怪物が流すような血があるはずがない、と僕は思った。そしてそんなことを思っている時に、背後の方から、仮面の人のそれと思わしき絶叫が聞こえてきたのだけれど、僕はその絶叫が繰返し繰返し、「犯罪者め、嘘つきめ！」と言っているとわかった。何だか不愉快だった。僕が犯罪者？嘘つき？それともこの僕を救済してくれた少年のことを言っているのか？監獄者の癖に人を殺そうとしたあいつの方が、よっぽど犯罪者だ。きつとあの仮面の人は僕を逃がしてしまつたから気が狂つてしまつて、適当なことを言っているのだろう。

「犯罪者め、嘘つきめ！」

僕は犬になった少年の背に乗って、夜の風をぶわーっと全身に浴びながら、満月の下を駆けた。

爽やかな風だ。牢獄の中では味わうことの決してできないことだ。僕は自由になったんだ。孤独をやめることになったんだ。胸がざわつくが、きつとこれは興奮しているに違いない。

甲が僕を待っている。乙たる僕を、待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7550x/>

無題 3 2 1 5 5

2011年11月11日13時54分発行